知的障害養護学校中学部における歌唱指導と教材選択

高田　順子

Ⅰ　問題

障害児の重度・重複化が進む近年，その障害特性や発達段階に即して子どもの発達を促すために，音楽活動は有効である。その中でも歌唱活動は，人間の身体と最も直接的に結びつく表現方法として音楽学習の中心に位置し，鑑賞や器楽等の活動とも密接な関係をもつ活動であるといえる(閏間，1988)。

知的障害養護学校中学部における音楽の目標は「表現及び鑑賞の能力を培い，音楽についての興味や関心を深め，生活を明るく楽しいものにする態度と習慣を育てる」である（文部省，1999)。指導においては，思春期の心情面を考慮し，生徒が充実感や満足感を味わいながら，自己表現力を豊かに広げることが大切である。

文部科学省著作音楽教科書（以下，著作教科書）は，生徒の発達段階に即し主体的に音楽を楽しむことができる歌唱教材を数多くとりあげている。しかし，著作教科書は活用されることが少なく，107条本とよばれる絵本や歌集が多く選択されている（齋藤・齋藤，1997)。

また，歌唱能力において，知的障害児の声域は狭く低い位置にあること（斉藤，1973）や，声域の幅が年齢の増加とともに広がっていく（関口，1987）ことが報告されている。そして，小学部高学年から中学部の時期にかけて迎える変声期にかかわって，声域の問題や息もれ，かすれ声，地声や怒鳴り声等の発声の問題があげられている（森・横山，1987)。

しかし，知的障害養護学校での歌唱指導においては，これらの問題に対処した教材選択や提示方法が明らかにされていない。それゆえ，歌唱指導および教材選択がどのように行われているかについて実態を調査する必要がある。

Ⅱ　目的

知的障害養護学校中学部における，生徒の発達段階や歌唱能力，変声期に考慮した歌唱指導および教材の在り方を明らかにする。

Ⅲ　方法

予備調査Ⅰ・Ⅱによって，質問紙項目を決定し，2006年８月に本調査を実施した。対象は，全国の知的障害養護学校中学部音楽担当教諭(計457名）とし，質問紙調査を郵送依頼した。回収率は66%であった。質問内容は，①歌唱のねらい，②集団構成，③実態把握・個別の目標設定，④教材選択，⑤教材提示，⑥歌唱指導，⑦使用教材，⑧回答者自身の指導能力と今後獲得したい能力とした。

次に，本調査で得られた結果をもとに，著作教科書および検定教科書（教育出版)，107条本その他から歌唱教材計100曲を抽出し教材分析を行った。分析は，音域やリズム，歌詞，歌唱指導に関する段階などについて行い，教科書解説および本調査にもとづく声域や発声等に配慮した指導法や留意点について検討した。

Ⅳ　結果

本調査の結果，歌唱指導において「他者と楽しく歌う」ことをねらいとする回答が半数以上であり，次いで「様々な音楽に触れる」ことをねらいとする回答があげられた。しかし，「良い発声の仕方を身につける」「歌詞の発音やそのことばを正しく身につける」ことをねらいとする回答は１割に満たなかった（図１)。実態把握や個別の目標設定は，「教員間でのミーティング」や「行動観察」によって行うとする回答が６割以上であったが，「個別の指導計画等の文書」を用いた実態把握・目標設定は４割に満たなかった。また，活動集団は「学級・学年・学部など集団の大きさを重視」したとする回答が半数をしめ，学校のカリキュラムや職

員数，教室等の物的環境面の制限に影響を受けるとする自由記述が多くあげられた。

歌唱教材を選択する際に,「手遊びや身体運動を含む教材」「季節や行事に応じている教材」が９割以上,「生徒の好きな曲・知っている曲」が８割以上の回答者によって重視されていた(図２)。また，配慮する内容として「生活年齢」が８割以上,「音楽の経験や能力に応じる」が７割以上の回答者によって選択された。また,「音域」や「リズム」「音程」の難易度,「歌詞」の内容を配慮して教材選択する結果が得られた。歌唱教材は，生徒の声域に応じて選択されるとともに，原曲を移調して提示することや分担唱，混声合唱などの取り組みがあげられた（図３)。その他，伴奏等の演奏上の工夫やマイク等の教具の使用についての回答があげられた。

具体的な発声指導において，姿勢や口形など身体づくりが重要視されており,「イメージ化」を促す教師の声かけの回答が多くあげられた。その他,「範唱」「教師が一緒に歌う」「聴く活動」など教師の範唱やCDを聴き覚えて歌う聴唱が，歌唱指導の方法としてあげられた。また，全ての指導において「賞賛・意欲づけ」を行うための手立てが多く回答された。音楽活動に関する発達を適切に評価し生徒に伝えることによって，生徒の自信や意欲をひきだす結果につながるとする回答が多くあげられた。

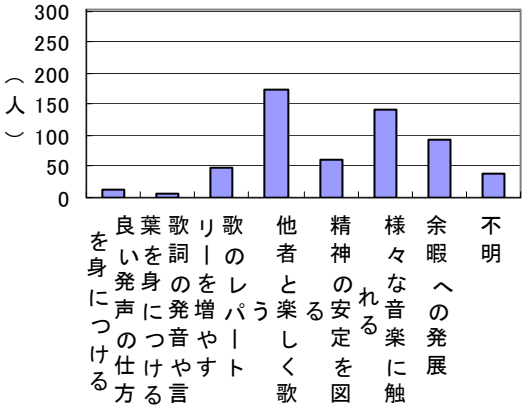

図１　歌唱のねらい（N＝302人）

教材分析の結果，対象教材の音域は「狭」（７度以下）が19曲,「中」（完全８度）が31曲,「広」（９度以上）が 50 曲であり，１オクターブ以上の曲が多く，歌詞に擬音語や擬態語が多く含まれていることが明らかとなった。その多くが著作教科書に掲載されている教材であった。その他，質問紙調査において使用頻度が高かった107条本その他の教材には，アニメソングや TV・ポピュラー音楽が多くあげられた。これらの教材は，著作教科書教材や歌唱共通教材に比べて音域の広い曲が多く，符点や３連符を含むなど旋律・リズムにおいて難易度は高かった。

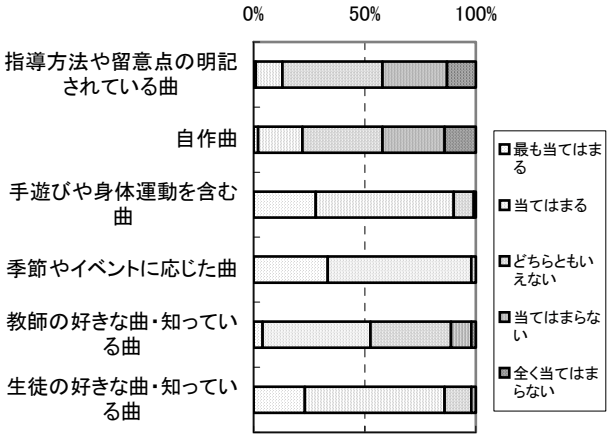

図２　教材選択時に重視する視点（N＝302人）

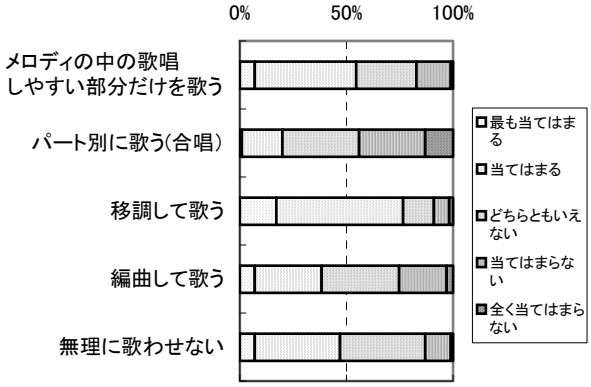

図３　声域に配慮した提示方法（N＝302人）

Ⅴ　考察

質問紙調査の結果からは，歌唱活動が音楽活動や他者と歌うことを楽しむことをねらいとして行われており，発声や発音，ことばの獲得がねらいとされていない実態が示唆された。堀田（1993）やノードフ・ロビンズ（1998）は，歌唱における歌詞の重要性や特質を生かして，音楽を活用したことばの獲得をねらいとする取り組みを報告している。発声・発音の困難な生徒が多く在籍する知的障害児養護学校において，歌唱指導にこれらの取り組みを導入することは望ましいと考える。

生徒の楽しんでいる様子のみとりは，担当の教師などの主観によるところが大きいことが推測される。そのため，歌唱活動における生徒の発達や能力が適切に把握され，授業の展開に反映されるための具体的な手立てが必要となる。その際に，実態把握や目標設定の方法としてあげられた行動観察や，それをふまえた教員間のミーティングなどにおいて，生徒の歌唱活動時の様子を客観的にみとり，共通理解をもって指導にあたることが必要であると考える。

また，楽しく歌うことのよる生徒の充実感や達成感は，他の生徒や教師との社会性の中で育まれることが推測される。そのため，声域が狭かったり発声が困難であったりする知的障害児に対して個々の特徴に応じた教材の選択と提示を行うことが重要である。その点において，原曲の移調を行って教材を提示するとの回答が多かった。しかし，分析した教材はほとんどが１オクターブ前後の音域の曲が多く，その位置もほとんど C^1（一点ハ）・D^1（一点ニ）から C^2（二点ハ）・D^2（二点ニ）の曲が多かった。このことは，原曲を移調して提示しても生徒の声域以上に音域が広いことが考えられ，移調するだけではなく，編曲して提示することが声域や発声にあった歌唱指導を可能にするのではないかと考える。具体的には，生徒の歌唱可能な音域の旋律や声部を分担して自信をもって歌うことや，他者との応答唱による充実感をもつことなど，歌唱への参加を可能とする手立てや工夫が必要となる。

教材を選択する際には，生徒の好む音楽や馴染みのある曲，すでに知っている曲を活用する回答が多かった。歌唱指導の導入や音楽活動の展開の一部において，これらの視点に沿った教材を活用することは生徒にとっても抵抗感が少なく，発声や発音，歌唱の技能を獲得・伸張することに着目して指導を行うことができると考える。その上で，生活年齢や季節・行事に応じた教材や身体表現，器楽演奏を取り組むことは，日常生活や社会生活を意識することにつながり，音楽活動への参加をさらに促す。

これらの結果をふまえ，齋藤・齋藤（1997）および松井（1980）を参考に「声の発達やその状況に配慮した段階」（表１）を作成した。歌唱指導に関する段階は，生徒の発達や歌唱能力，その段階における具体的活動や様々な提示方法，留意点が関連づけて示されることが必要である。また，各段階に応じた教材の音楽的特徴を明らかにすることにより，生徒の発達や歌唱能力の伸長がはかられるものでなくてはならないと考える。以上の点から，Ⅰ段階は「発声・発音を中心に行う段階」，Ⅱ段階は「旋律や簡単な歌を覚えて歌う段階」，Ⅲ段階は「正しい音程やリズムで歌う段階」と定義し，その内容を定めた。

さらに，教材分析の対象100曲を「声の発達やその状況に配慮した段階」ごとに分類・整理し，より生徒の実態に即した「季節と歌唱指導の段階による歌唱教材の選択表」（表２）を作成した。その上で，各段階から１曲ずつ教材を選択し，個の段階に応じた提示方法と留意点について分析し，その提示方法を提言した。

文献

井上勝義（2004）年齢別声域配慮版こどものうた12か月．ひかりのくに．

松井紀和（1980）音楽療法の手引き．牧野出版．45-62.

三上伸子（1987）発達段階に即した歌唱教材選択の視点―小学校教科書における「変声期」の取り扱いの検討を通して．武蔵野音楽大学研究紀要，19，93-112.

齋藤一雄・齋藤加代子（1997）障害児のための音楽・リズム．明治図書.